

日本公衆衛生雑誌（第1巻～第49巻）掲載論文の時代的変遷

日本公衆衛生雑誌編集委員会

はじめに

日本公衆衛生雑誌が創刊50年を迎えるにあたり、記念事業の一つとして、日本公衆衛生雑誌掲載論文の時代的変遷を分析することとした。まず、掲載された記事の総目次を入力し、そのうち「総説」、「原著」、「短報」、「公衆衛生活動」、「資料」として掲載された論文等につき、研究分野の分類、キーワードの入力を行い、研究分野、頻出キーワードの推移の集計を行った。またその結果から、各時代の研究テーマの消長の解析を行い、特徴を明らかにし、今後の公衆衛生領域の研究に寄与しようとするものである。

1. 研究方法

日本公衆衛生雑誌第1巻から第48巻の総目次、および第49巻1号から12号の各巻目次を元に、全記事の「表題」、「副題」、「著者」、「論文種類」、「巻」、「号」、「頁」を入力した。なお、「著者」については、共著の場合、総目次には主たる著者のみが掲載されているため、それに従った。また「論文種類」については、分析時点で使用されている分類に従う事とし、分析時点の分類と異なる第42巻4号以前については、各論文を調査し、分析時点の分類の定義に従い、再分類を行った。

更に、入力された総目次を元に、「総説」、「原著」、「短報」、「公衆衛生活動」、「資料」に該当する論文について各論文を調査し、「分野分類」、「キーワード」を入力した。なお、「分野分類」については、現在公衆衛生学会で使用されている分類、および第47巻1号に掲載された「日本公衆衛生雑誌編集の現況と今後の課題」（中村健一教授）の分類等を元に作成した。「キーワード」については、第36巻以降については、各論文に示されているものをそのまま入力し、それ以前のキーワードが示されていない論文については、各論文を調査し、キーワードを抽出した。

2. 分析結果

1) 記事種類別件数

第1巻から49巻の総記事数は、5,417件で、うち記事種類別に最も多いのは、「原著」で、2,399件で記事全体の44.3%を占める。次いで、「資料」932件（17.2%）、「会報」604件（11.2%）、「その他」518件（9.6%）、「論壇」358件（6.6%）、「総説」346件（6.4%）の順となっている。

なお、「その他」は、第1巻から15巻に多く、この時期は海外文献抄、他の学会の紹介などが多く掲載されていたためである。

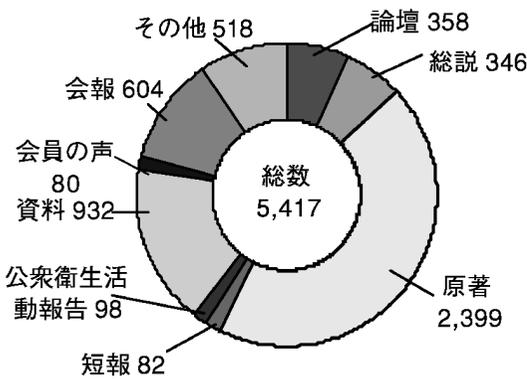
2) 分野別件数

「総説」、「原著」、「短報」、「公衆衛生活動」、「資料」に該当する論文の総論文数は、3,857件であった。うち、分野別に最も多いものは「疫学・保健医療情報」であり、563件、14.6%を占める。次いで、「環境保健」551件（14.3%）、「感染症」528件（13.7%）、「食品衛生・薬事衛生」279件（7.2%）、「健康教育・ヘルスプロモーション」237件（6.1%）、「母子保健・学校保健」237件（6.1%）、「成人保健（循環器疾患）」206件（5.3%）、「産業保健」157件（4.1%）の順となっている。

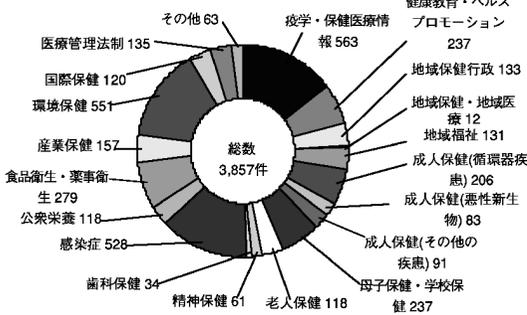
年次推移を見ると、第1巻から20巻（昭和29年～48年・1954～1973年）では「感染症、食品衛生」が多いが次第に減少している。次いで、第11巻から35巻（昭和39年～63年・1964～1988年）では「環境保健」が多くなっている。第26巻から49巻（昭和54年～平成14年・1979～2002年）にかけては健康教育、地域保健、地域福祉、老人保健、精神保健、医療管理法制などの「地域保健・福祉」が次第に多くなってきている。

ちなみに、各時期の分類別順位を見ると、第1～10巻（昭和29年～38年・1954～1963年）では、第1位「感染症」27.4%、第2位「食品衛生・薬事衛生」12.1%、第3位「環境保健」11.3%、第4位「疫学・保健医療情報」9.0%、第5位「母子保健・学校保健」8.0%の順となっている。第21～30巻（昭和49年～58年・1974～1983年）では、

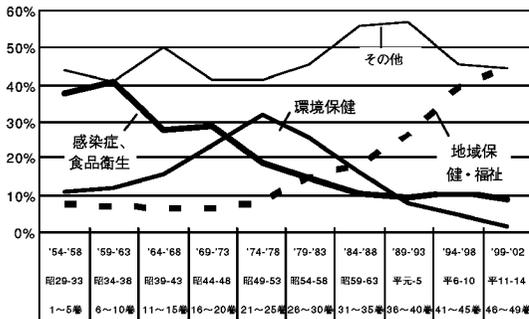
記事種別別件数



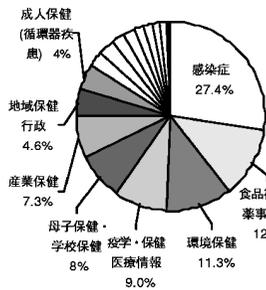
分野別論文数



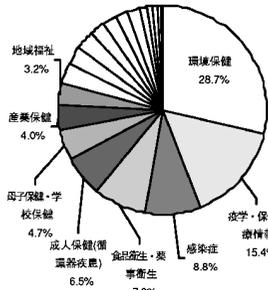
分野推移



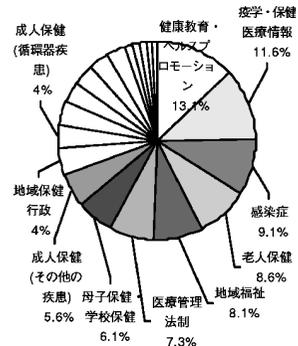
1~10巻(昭29-38・1954-1963)



21~30巻(昭49-58・1974-1983)



41~40巻(平6-14・1994-2002)



第1位「環境保健」28.7%，第2位「疫学・保健医療情報」15.4%，第3位「感染症」8.8%，第4位「食品衛生・薬事衛生」7.9%，第5位「成人保健(循環器疾患)」6.5%の順となっている。第41~49巻(平成6年~14年・1994~2002年)では、第1位「健康教育・ヘルスプロモーション」13.1%，第2位「疫学・保健医療情報」11.6%，第3位「感染症」9.1%，第4位「老人保健」8.6%，第5位「地域福祉」8.1%の順となっている。一方、分野集中の傾向をみると、初期(第1~10巻)では上位3分野で50%以上、7分野で80%以上と分野集中が見られる。中期(第21~30巻)でも上位3分野で50%以上、9分野で80%以上となっている。一方、近年(第41~49巻)では上位5分野で50%以上、11分野で80%以上となっており、分野集中が低く、研究領域の多様化傾向がうかがえる。

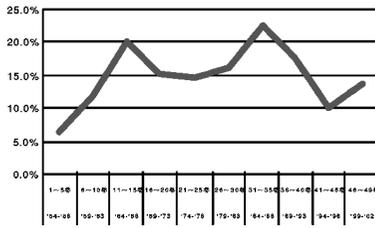
3) 分野別推移の詳細

3-1) 疫学・保健医療情報

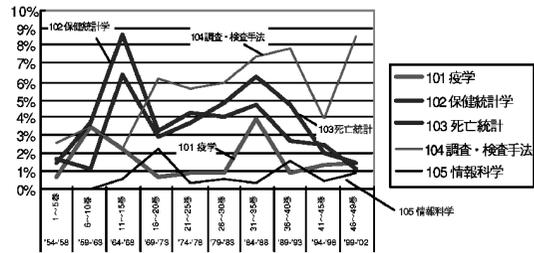
疫学・保健医療情報は、時期にかかわらずほぼ一定の論文数が掲載されている。しかし、第11~15巻(1964年~68年)と第31~35巻(1984年~88年)の2つのピークが見られる。その内訳をみると、前者は保健統計学が多くなっており、感染症のピークを過ぎ、新しい公衆衛生の学問議論が中心となっている。後者は、公害などの環境保健対策のピークを過ぎた時期であり、疫学手法の見直し、新しい手法研究などが中心となっている。すなわち、公衆衛生の一時代の後半に学問的議論が活発となり、次の時代の公衆衛生領域を切り開いてきた事がうかがえる。

さらにいえば、近年再び増加傾向にあるかにみえる。老人保健などの対策のピークが過ぎ、新し

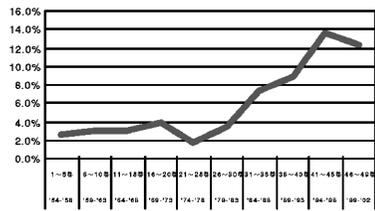
1 疫学・保健医療情報



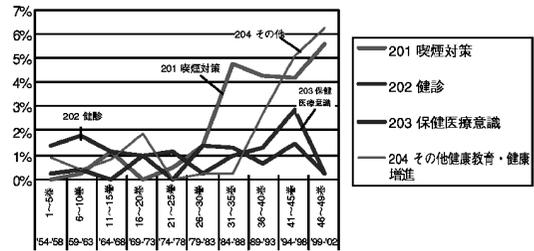
1 疫学・保健医療情報



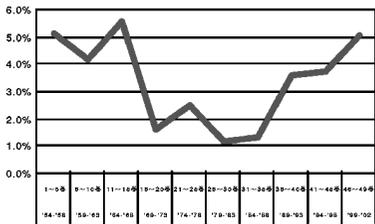
2 健康教育・ヘルスプロモーション



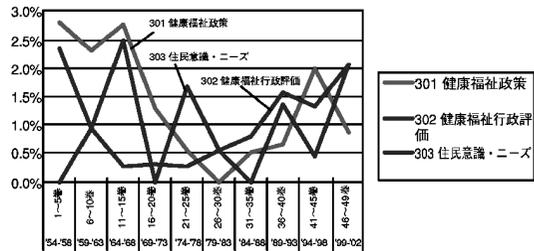
2 健康教育・ヘルスプロモーション



3 地域保健行政



3 地域保健行政



い時代を迎えようとしているのだろうか。

3-2) 健康教育・ヘルスプロモーション

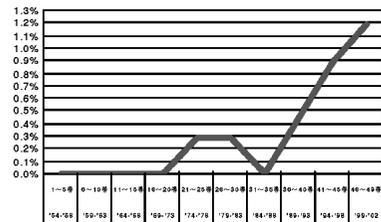
健康教育・ヘルスプロモーション分野は、初期には少なく、31巻（昭和59年・1984年）以降増加している。

その内訳をみると、初期には「健診」が多いがその他は少なくなっている。近年の増加は、「喫煙対策」、健康増進などの「その他健康教育・健康増進」が多くを占めている。また、「保健医療意識」のテーマも多くなっていることが特筆される。しかしながら、直近の41～49巻（平成11～14年・1999～2002年）では、やや減少傾向にある。

3-3) 地域保健行政

地域保健行政に関する論文は、1～15巻（昭和29～43年・1954～1968年）には多かったが、その後減少し、36巻（平成元年・1989年）以降再び増加している。

4 地域保健・地域医療

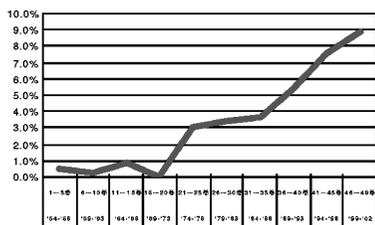


その内訳を見ると、大きくばらついてはいるが、時代により求められる保健所の役割が研究されていることが示されている。

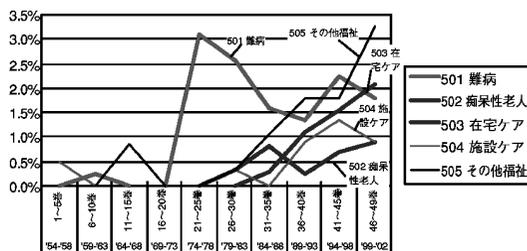
3-4) 地域保健・地域医療

「地域保健・地域医療」分野の論文は、初期にはほとんどなく、近年急増している。特に在宅医療、訪問看護等の議論が多くなっている。

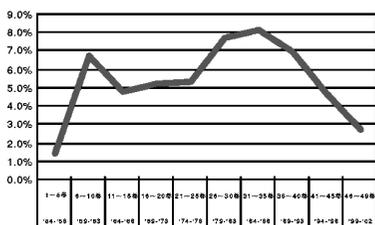
5 地域福祉



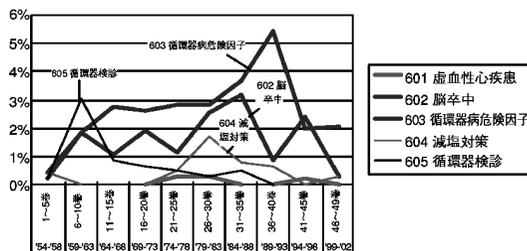
5 地域福祉



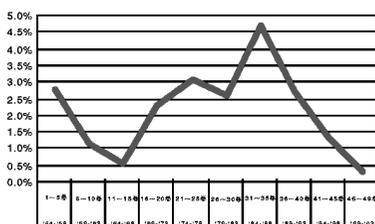
6 成人保健(循環器疾患)



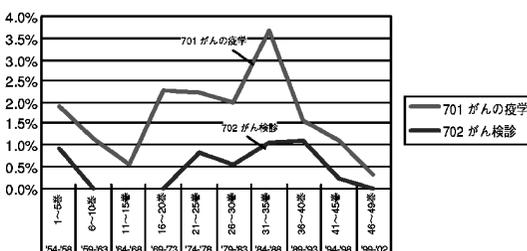
6 成人保健(循環器疾患)



7 成人保健(悪性新生物)



7 成人保健(悪性新生物)



3-5) 地域福祉

「地域福祉」も初期にはほとんど論文がなく、21巻（昭和49年・1974年）以降増加しており、近年も増加を続けている。

その内訳をみると、21巻からの中期の増加は、「難病」によるものであり、「痴呆性老人」、「在宅ケア」、「施設ケア」、「その他の福祉」などは31巻（昭和59年・1984年）以降急増しており、「地域保健」と同様の傾向を示している。

3-6) 成人保健（循環器疾患）

「成人保健（循環器疾患）」は、6～10巻（昭和34～38年・1959～1963年）と26～40巻（昭和54～平成5年・1979～1993年）の2つのピークがあり、近年は急激に減少している。

初期のピークは、「循環器検診」によるもので、後期のピークは「循環器病危険因子」によるものである。「循環器病危険因子」については、初期

から中期にかけては血圧の議論が多いが、後期は血清脂質の議論が多くなっている。「脳卒中」については、時期によるばらつきはあるものの一定の論文が発表されていたが、近年は極めて少なくなっている。

3-7) 成人保健（悪性新生物）

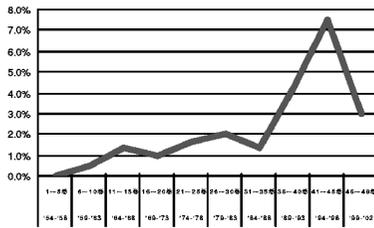
「成人保健（悪性新生物）」については、31～35巻（昭和59～63年・1984～1988年）をピークとして、その後は急激に減少して、近年は極めて少なくなっている。

内訳で見ても、「がんの疫学」、「がん検診」ともほぼ同様の傾向で、特に「がん検診」については近年、殆どなくなっている。

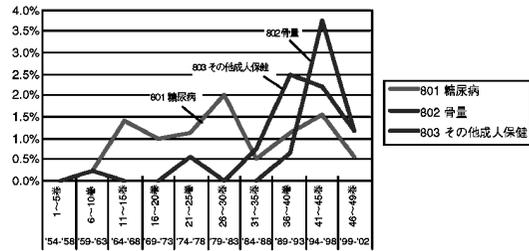
3-8) 成人保健（その他の疾患）

「成人保健（その他の疾患）」は、41～45巻（平成6～10年・1994～1998年）がピークで、近年は減少している。

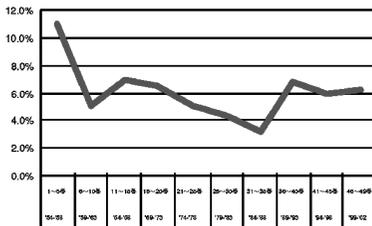
8 成人保健(その他の疾患)



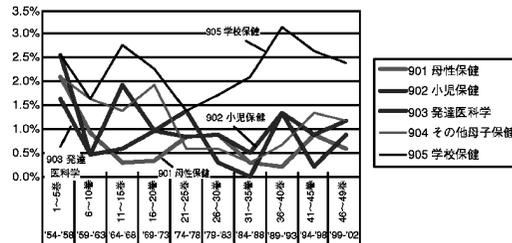
8 成人保健(その他の疾患)



9 母子保健・学校保健



9 母子保健・学校保健



その内訳で見ると、「糖尿病」は時期にかかわらず、ほぼ一定の論文が見られる。「骨量」については41～45巻（平成6～10年・1994～1998年）に多くの論文が掲載されたが、その後は減少している。36～44巻（平成1～10年・1989～1998年）にかけては「その他の成人保健」が多くなっているが、特に肥満，生活習慣等のテーマが多い。

3-9) 母子保健・学校保健

「母子保健・学校保健」は、時期に拘らずほぼ一定数の論文が掲載されているが、全体的にやや減少傾向を示している。

内訳では、「学校保健」が多いが、初期には集団感染対策，給食などの問題，後期には肥満，不登校などの問題が多くなっている。母子保健の分野では，ばらつきが大きく明確な傾向は読み取りにくい，初期は「虚弱児，未熟児」が，後期には「育児不安」がテーマとなっている。

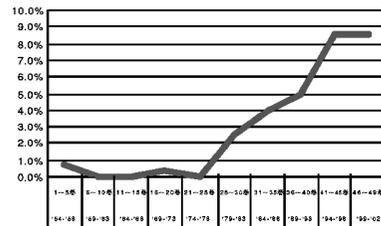
3-10) 老人保健

「老人保健」は，初期には殆どないが，26巻（昭和54年・1979年）頃から急激に増加してきている。当初は，長寿，加齢によるADL変化などの研究が多かったが，次第にねたきり，在宅高齢者，自立という問題に推移してきている。

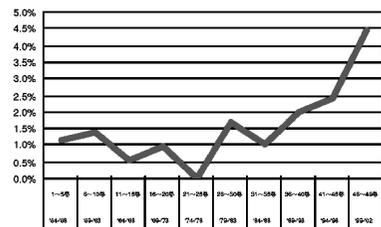
3-11) 精神保健

「精神保健」も初期，中期に少なく，近年急増している領域である。初期では，「薬物乱用」，中

10 老人保健



11 精神保健



期では「精神分裂病」，近年では「ストレス，QOL」が主要テーマとなっている。

3-12) 歯科保健

「歯科保健」は，1～10巻（昭和29～38年・1954～1963年）と，26～45巻（昭和54～平成10年・1979～1998年）の2つのピークをもつ。全般的に「う歯」の問題が多いが，第1のピークが乳幼児から小児が対象となっているのに対し，第2の

ピークは高齢者が対象となっているという違いがみられる。

3-13) 感染症

感染症は、一定して減少傾向にあるが、近年はやや増加している。

1~10巻(昭和29~38年・1954~1963年)では、「結核対策」が極めて多く、「寄生虫」、「赤痢」、「ジフテリア」、「性感染症」(梅毒、淋病)および「その他の感染症」も多くなっている。「結核対策」はその後急激に減少しているが、近年再びやや増加する傾向を示している。近年では、「HIV/AIDS」が多くなっている。

3-14) 公衆栄養

「公衆栄養」は、全般的に摂取栄養素のバランスに関するテーマが多いが、31~35巻(昭和59~63年・1984~1988年)がピークとなっている。内訳で見ても、この時期は「公衆栄養」、「栄養疫学」

とも多くなっており、特に脂質の摂取、肥満等のテーマが多くなっている。

3-15) 食品衛生・薬事衛生

「食品衛生・薬事衛生」は、6~10巻(昭和34~38年・1959~1963年)にピークがあり、その後は減少傾向にあり、近年は極めて少なくなっている。

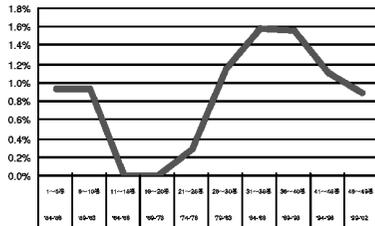
内訳では、「食中毒」、食品製造環境、食品添加物などの「その他食品衛生」が多くなっている。16~25巻(昭和44~53年・1969~1978年)では、スモンなどの「医薬品副作用」、「上水道・水質」などの水質汚染のテーマが多くなっている。

3-16) 産業保健

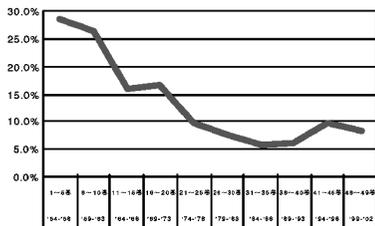
「産業保健」の分類には、「農漁山村保健」のテーマを含めたため、そのテーマの多い1~5巻(昭和29~33年・1954~1958年)が最大のピークとなっている。

「農漁山村保健」は、農薬散布方法の問題、女

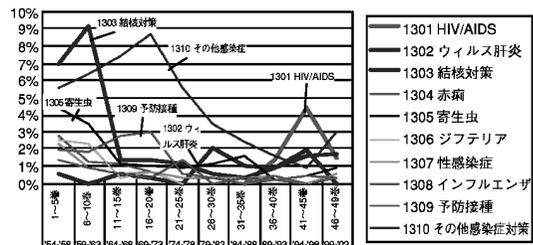
12 歯科保健



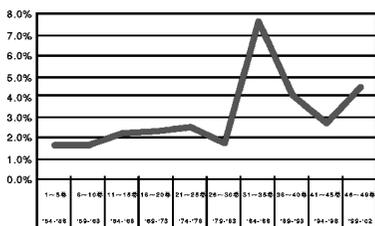
13 感染症



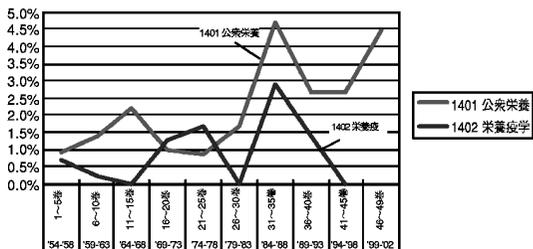
13 感染症



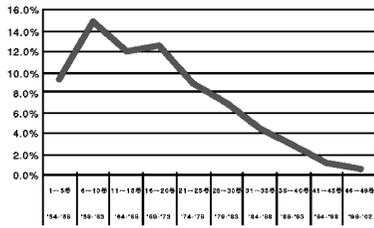
14 公衆栄養



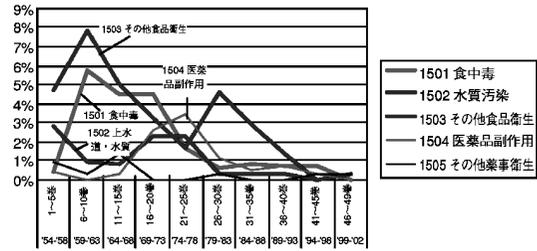
14 公衆栄養



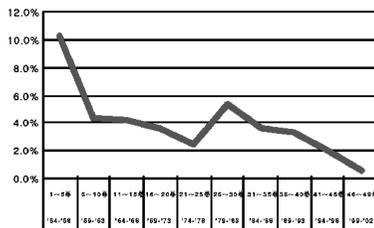
15 食品衛生・薬事衛生



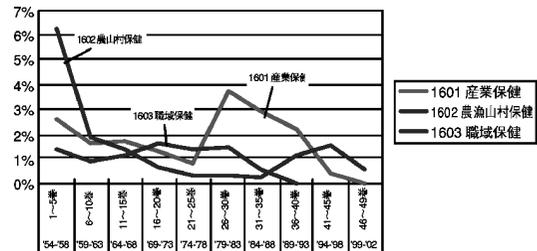
15 食品衛生・薬事衛生



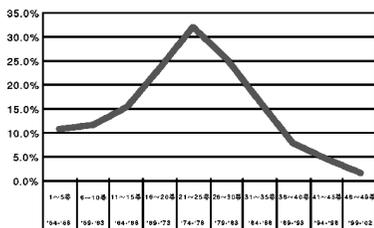
16 産業保健



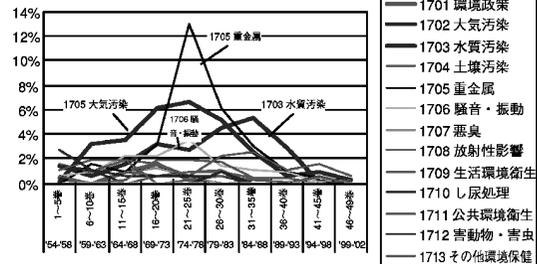
16 産業保健



17 環境保健



17 環境保健



性の労働・生活時間の問題などのテーマが多く、1～5巻（昭和29～33年・1954～1958年）をピークとして、その後は急激に減少している。「産業保健」と「職域保健」は、明確な分類が困難で、特定の産業にかかわるものと、職場の環境に関わるものとに分類したが、全般的に有害作業等の問題が多く、当初は職場内の対策に限定されていたものが、26～40巻（昭和54～平成5年・1979～1993年）には産業構造とのかかわりに主体が移行してきた傾向が見られる。

3-17) 環境保健

「環境保健」は、初期から増加を示し、21～25巻（昭和49～53年・1974～1978年）にピークとなった後は次第に減少して、近年では極めて少なくなっている。

ピーク時の21～25巻（昭和49～53年・1974～

1978年）には、「重金属」、「大気汚染」、「騒音・振動」が多くなっている。「水質汚染」については、それよりやや遅れて31～35巻（昭和59～63年・1984～1988年）がピークとなっている。なお、1～5巻（昭和29～33年・1954～1958年）では、ねずみ、ハエ、蚊などの「害動物・害虫」のテーマが最も多くなっている。また、41～49巻（平成6～14年・1994～2002年）の近年では、シックハウスなどの「生活環境衛生」のテーマが最も多くなっている。

3-18) 国際保健

「国際保健」は、全体的にほぼ一定の論文が掲載されているが、1～15巻（昭和29～43年・1954～1968年）と16～30巻（昭和44～58年・1969～1983年）、36～49巻（平成1～14年・1989～2002年）の3つの時期に大別される。

第1の時期では、欧米の保健医療システムについての紹介が多く、第2の時期では、アジア諸国の伝染病の問題、第3の時期では発展途上国の保健医療システムに関わるテーマが多くなっている。

3-19) 医療管理法制

「医療管理法制」のテーマは初期には少なく、36～49巻(平成1～14年・1989～2002年)の近年、急増している。

特に、41～49巻(平成6～14年・1994～2002年)には「医療経済」が最も多くなっている。また、「病院経営管理」、「保健医療従事者教育」のテーマも増加している。1～5巻(昭和29～33年・1954～1958年)では、戦後の公衆衛生政策評価の「医療政策」テーマが多いという特徴がある。

3-20) その他

特定領域に分類が困難なテーマを「その他」として分類したが、36～49巻(平成1～14年・1989～2002年)の近年、急増しているという特徴がある。内訳としては、花粉症、アレルギー、災害医療、末期医療等の幅広いテーマが多くなっている。

4) キーワード別件数

キーワードは、全体で6,791語、14,654件に上る。特定のキーワードへの偏りがあるかABC分析で検証したところ、全体の80%に達するA範囲は3,861語、95%に達するB範囲は6,059語であ

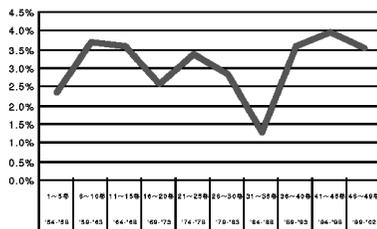
り、特定の偏りがないことがうかがえる。従って、頻出キーワードの分析自体有意ではないが、あえて20件以上の語を示すと、62語上げられる。最も多いのは「大気汚染」で、109件(全体の0.74%)である。次いで「結核」が84件(0.57%)、「疫学」77件(0.53%)、「集団検診」76件(0.52%)、「高齢者」73件(0.50%)、「高血圧」71件(0.49%)などと続く。

主なキーワードについて年次推移をみると、「大気汚染」は、6～30巻(昭和34～58年・1959～1983年)に多く、その前後では殆ど出てこない。「結核」は、1～10巻(昭和29～38年・1954～1963年)に多く、それ以降は極めて少ない。「高齢者」は31～35巻(昭和59～63年・1984～1988年)以降、増加している。

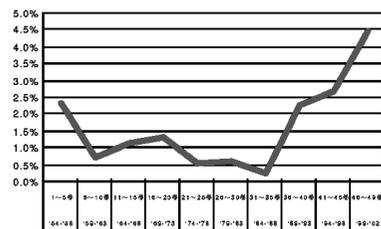
「集団検診」、「高血圧」は6～10巻(昭和34～38年・1959～1963年)にピークがあり、それ以降は減少しているが、「脳卒中」は、次第に増加して31～35巻(昭和59～63年・1984～1988年)にピークとなるが、それ以降急減している。「食中毒」は6～10巻(昭和34～38年・1959～1963年)にピークがあり、それ以降は減少している。

「カドミウム」、「水銀」は、21～25巻(昭和49～53年・1974～1978年)にピークがある。「サルモネラ」は16～20巻(昭和44～48年・1969～1973

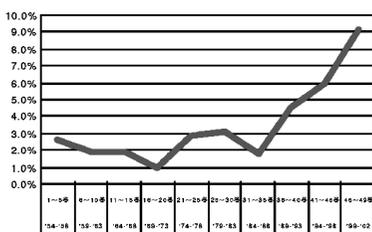
18 国際保健



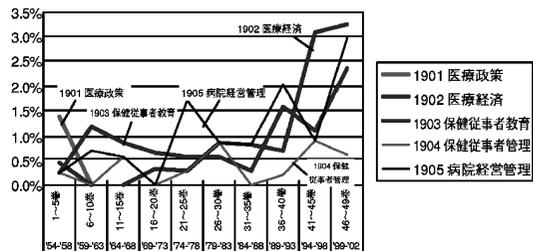
20 その他



19 医療管理法制



19 医療管理法制

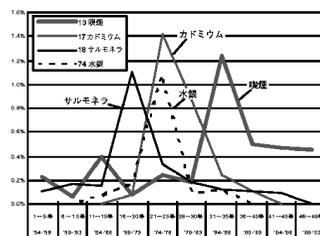
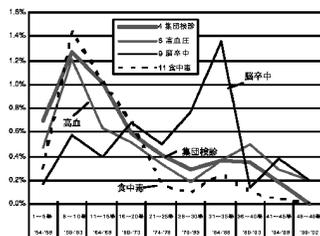
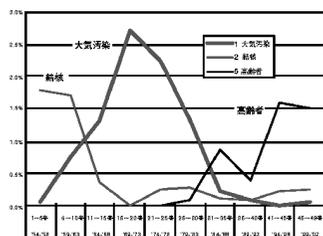


順位	キーワード	計
1	大気汚染	109
2	結核	84
3	疫学	77
4	集団検診	76
5	高齢者	73
6	高血圧	71
7	保健所	69
8	死亡率	67
9	脳卒中	65
10	血圧	59
11	食中毒	59
12	流行	55
13	喫煙	53
14	死亡	40
15	騒音	38
16	有病率	34

順位	キーワード	計
17	カドミウム	31
18	サルモネラ	31
19	汚染	31
20	学童	31
21	地域	31
22	集団発生	30
23	生活習慣	30
24	糖尿病	30
25	予防接種	30
26	追跡調査	29
27	難病	29
28	食品添加物	28
29	地域差	28
30	ジフテリア	27
31	胃がん	27
32	健康	27

順位	キーワード	計
33	健康教育	27
34	赤痢	27
35	予防	27
36	罹患率	27
37	公衆衛生	25
38	循環器疾患	25
39	肥満	25
40	インフルエンザ	24
41	自覚症状	24
42	住民	24
43	妥当性	24
44	保健婦	24
45	スモン	23
46	ワクチン	23
47	健康管理	23
48	呼吸器症状	23

順位	キーワード	計
49	死因	23
50	食品	23
51	中学生	23
52	農村	23
53	食生活	22
54	発育	22
55	スクリーニング	21
56	体重	21
57	乳児死亡率	21
58	梅毒	21
59	評価	21
60	身長	20
61	大腸菌	20
62	母子保健	20



年)にピークがある。「喫煙対策」は31~35巻(昭和59~63年・1984~1988年)にピークがある。

おわりに

日本公衆衛生雑誌1巻から49巻を通してみると、各時代背景により研究テーマがダイナミックに変化してきたことが把握できた。これは、公衆衛生という学問が、人々の生活、社会と密接に関わる実際的なものであることを意味し、時代の要請に適時に応えてきたその実態を雄弁に物語るものであると言えよう。また、時代を先取りするテーマが早くから表れ始めていることも指摘される。未来志向の研究姿勢が、つぎの新しい時代を切り開いてきたといえよう。時代の変わり目には

疫学、統計学、手法など基本に立ち戻った論議が多くなっていることも見逃せない。足元をしっかり固めなおすことによって、次の時代を本格的に迎えることができたと思われるからだ。未来学的視点からは、「先行指標」を探すべきといわれるが、公衆衛生学の時代の変化を示す先行指標は、「疫学、統計学、手法」論文数なのかもしれない。このような仮定にたつと、公衆衛生の分野では、現在老人保健を軸とした「健康の時代」がやや終息に向かってしていると推定される。再び疫学、統計学、手法議論が増加しつつあることから、時代の変わり目に入ったというべきかも知れない。多様な分野の研究が盛んなことから、新時代の到来が予感される。